

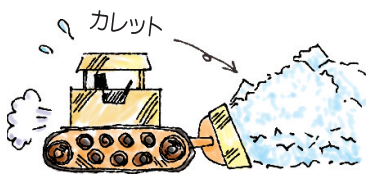
ガラスびんの国内資源循環について

動向が注目される素材の在り方

最近のニュースでは、海洋汚染の問題から海洋動物の報道や、有名レストラン・カフェ等の店舗で、ストローを紙素材へ移行する取組みが紹介されています。

海外ではリユースシステムを構築する活動が一部の食品ブランドで始まり、使用されている包材が使い切り（ワンウェイ）素材からリユース素材に移行しているなど、動向に注目が集まっています。今回は、国内におけるガラスびんの資源循環をご紹介します。

ガラスびんの資源循環は、国連で設定された2030年までの国際目標『SDGs』の中で「持続可能な生産と消費」をはじめとした項目に寄与するものと考えられます。



ガラスびんの回収率は約7割

2017年の国内のガラスびん市場投入量は、ガラスびん3R促進協議会によると**1,375千トン**でした。（『ガラスびん製造会社主要6社販売量+輸入』から輸出分を引いた量）このうち、**使用後に廃ガラスとして回収されたものが約7割**、**回収されずに埋立てなどに回るものが約3割**あるとされています。

82%というガラスびんの高い循環率

回収された**69%**のうち**ガラスびんに再生される割合は、82%**と非常に高い資源循環が保たれています。プラスチックの海洋汚染問題で容器包装分野にも他国に頼らない国内の資源循環が強く求められる今日ですが、ガラスびんは製造→収集→選別→回収の中で**国内の循環システム**が確立しているため、諸外国の廃棄物輸入規制の影響を受けることはありません。

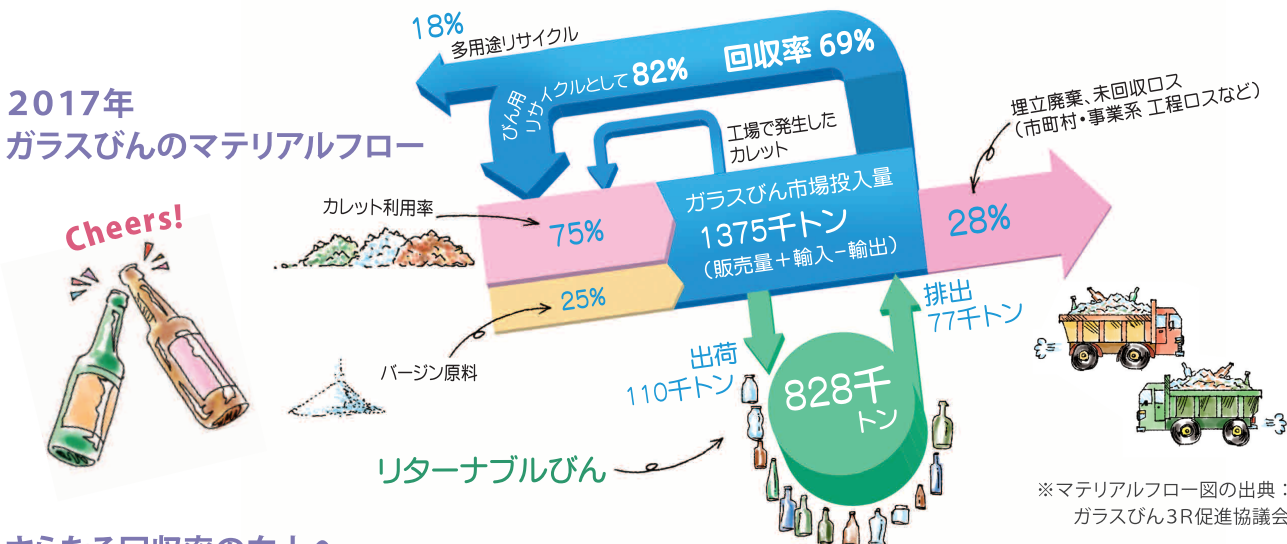
回収されたガラスびんは、リサイクル事業者によって**不純物除去や色分別され、再生資源**：

「カレット」となります。**カレット**には、前述した回収カレットとガラスびん会社の製造工程で不良品等から発生する工場カレットがあります。これらを合計したカレット利用率は**75%**となります。（※1）つまり、ガラスびんの75%が再生資源からできていて、**天然資源の節約に大きく貢献**しています。

※1：カレット利用率 = (回収カレット + 工場発生カレット) ÷ ガラス溶解量



2017年 ガラスびんのマテリアルフロー



※マテリアルフロー図の出典：ガラスびん3R促進協議会

さらなる回収率の向上へ

再生資源のカレットをより多く使う事で、天然資源を含むバージン原料の節約と、ガラスの溶解に必要なエネルギーを削減できます。この為、ガラスびんメーカー各社は多くのカレットを使いたいのですが、まだまだ不足しているのが現状です。

特に西日本はガラスびん製造工場が多いため不足傾向にあります。

現在、未回収分を少しでも減らすべく、業界団体、市町村、行政、消費者の皆様と協力しながら回収率の向上に努めています。

ガラスびんの Good Point

使用後のガラスびんは、細かく砕いてびんの原料として、何度も再利用することができます。今あるガラスびんもひよっとすると数百年前のガラスからできているかもしれません。